文化勲章の陶芸家・故青木龍山氏の晩年記出版

天目に生きた父たどる

有田町の陶芸家青木清高さん(56)が、文化勲章受章者の父、青木龍山氏（1926～2008）の晩年記「陶の道 最終章―父龍山」を自費出版した。今年4月に迎えた七回忌を機に、受章から亡くなるまでの波乱に満ちた2年半を中心に、当時のメモや知人の話を参考に1年がかりでまとめた。掲載された家族の会話や写真からは、龍山氏の家族愛や仕事に対するひたむきさがのぞく。清高さんは「陶の道一筋に生きた龍山の人間らしさを感じていただければ」と話す。

青木龍山氏の写真の前で「陶の道」を手にする青木清高さん

龍山氏は、黒を基調とした「天目」で独自の世界観を切り開き、05年に文化勲章を受章した。だが1カ月後、龍山氏を支え続けた妻の綾子さんにがんが見つかり、07年に73歳で他界すると龍山氏も1年を待たず81歳でこの世を去った。「陶の道」はそんな喜びと悲しみが交錯する場面から始まる。

次々と開かれる祝いの席に病の綾子さんを残して出掛けるたびに「母さん、すまない」と繰り返した龍山氏。家では「まるで一瞬でも母の病を忘れようとしているかのように」、仕事場にこもり一心不乱に絵を描き、妻が亡くなった日は一晩中、涙を流し「綾子、綾子」と呼び続けた。

龍山氏の死後、清高さんはテープで封印された箱を見つけた。中には旅行パンフレットと、手術後に声が出せず耳が聞こえなくなった妻との筆談メモ。「退院したらゆっくり温泉でもいこう」。結局、

息子が見た 家族と仕事への「愛」

工房で寄り添い笑顔を見せる龍山氏と綾子さん＝2004年6月、清高さん提供

実現することはなかった。

■　■

「おいは100年後に残る作品ばつくりよっぱい。おまえもそんくらいの気概をもって仕事ばせんといかんぞ」「感動もせんで作品の作らるっか」。清高さんが父から受けた印象深い言葉も克明に記されている。

「天目は龍山が追い求める世界。おまえはおまえの表現方法を見つけんば」。清高さんが青磁の世界を究めようと思ったのが、この言葉だった。ところが、亡くなる1カ月前に突然「おまえも天目ばせんばのう」と漏らしたという。

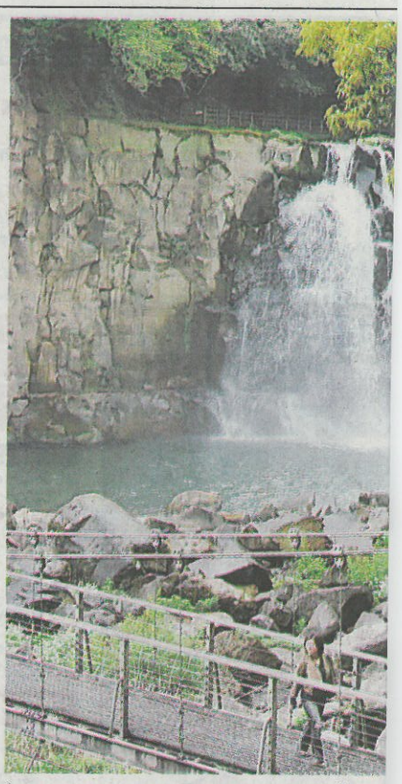
昨年の個展で、約20年ぶりに天目の作品を展示した清高さん。「父は生涯追い続けた天目の世界を、私や孫の世代で完成させてほしいと思っていたのだろうか」。そして、晩年記の最後をこう締めくくった。「父が残した言葉の財産を胸に刻み、さらに精進していきたい」

■　■

晴れやかな文化勲章の親授式、綾子さんと笑顔で寄り添う工房、孫との触れ合い…。文章に添えた133枚の写真も龍山氏の素顔を写す。A5判183㌻で計500部を出版し、ゆかりがあった人たちや図書館などに贈る予定だ。

日本芸術院会員就任ごろまでを描いた「ひたすらに」（1994年）、文化功労者表彰までの「陶心一如」(00年）に続く〝龍山史〟はこれで完結した。「記録を残すことができてほっとしました。ほめられた記憶はほとんどありませんが、今回の仕事だけは父も少し喜んでくれるような気がします」。清高さんは穏やかな笑顔を見せた。青木龍山・清高工房＝0955（42）3272。

（杉野斗志彦）


水しぶきも涼しげな宮崎県都城市の関之尾滝

国民宿舎4施設「譲渡か廃止に」　唐津市が方針

唐津市は7日、市が所有する国民宿舎4施設について、民間譲渡か廃止する基本方針を市議会に説明した。市内には市町村合併で全国最多の国民宿舎があり、今後施設の老朽化などに伴う改修で財政負担の増加が懸念されることから、行財政改革の一環として民間譲渡を打ち出した。

虹の松原ホテル（築18年）▽いろは島（同42年）▽波戸岬（同8年）▽呼子ロッジ（同45年）。指定管理制度で2006年度から民間が運営しているが、大規模修繕費は市が負担している。虹の松原ホテルは空調設備の改修費に本年度約6千万円の予算を計上しているほか、いろは島と呼子ロッジは一部に耐震化補強の必要性が出ている。

市は本年度中に売却先公募のための要項づくりや売却予定価格を算定し、15年度に売却先の選定、16年度に改修を施し、17年度に引